平成２５年（ワ）第３８号、平成２５年（ワ）第９４号、平成２５年（ワ）第１７５号
「生業を返せ、地域を返せ！」福島原発事故原状回復等請求事件等
原　告　中島　孝　外
被　告　国、東京電力株式会社

意　見　陳　述　書

２０１３（平成２５）年１１月１２日

福島地方裁判所民事部　御中

原　　告：高木光雄

（原告番号 H-101）

１，原発事故前の生活

私は、１９９９年から、福島県南相馬市小高区で妻とともに生活をはじめ、翌年から、小高にあるラーメン店を友人から引き継いで営みはじめました。

ラーメン店の仕事は大変でしたが、お客さんがラーメンを喜んで食べてくれる顔を見たり、常連客との日常会話を楽しんだりといったことが、いつしか私の生きがいになっていました。

私は、小高での暮らしを気に入っていました。秋になると、近所の小高川で、千から万単位の丸太のように大きな鮭が、水しぶきをあげながら上流を目指す様を見ることができたのです。

また、近所の人から、自家菜園や畑で獲れた野菜をお裾分けしてもらうことも楽しみでした。友達には、季節毎に山へ招待してもらい、春は山菜や竹の子を、秋はキノコを採らせてもらいました。

私は、このように自然豊かな小高を終の住み処と考えていたのです。

2，避難

２０１１年３月１１日、自宅と私の店が津波被害を受けたため、私と妻は、一晩車内で過ごしたあと、近くの中学校の体育館へ避難しました。

１３日、外出から体育館に戻ってきたところ、多くの人が消え、閑散としていました。私は、おかしい、みんなどこへ行ったのだろうと思いましたが、理由はわかりませんでした。情報が一切入ってこなかったので、まさか原発が爆発したなどとは思わなかったのです。

夕方になって、原発が爆発したと聞き、早く遠くに逃げなければ、と思いました。

私たちは、車に飛び乗り、新潟方面を目指しましたが、運転しながら、放射能が後ろから迫ってくるような感覚に襲われ、焦燥感にかられました。

その後、私たちは、一週間、会津の体育館で避難生活を送りましたが、当時７０歳近かった私には、体力的にも精神的にもきついものでした。冷たく堅い床の上では、満足に眠れませんでしたし、温かい食事ももちろん食べることができませんでした。

私たちは、その後、親戚を頼って、宮城県、埼玉県と転々として避難生活を続け、6月から原町の借り上げ住宅へ入居し、現在もそこで生活をしています。南相馬へ戻ったのは、妻が、妻が経営している原町のラーメン店を再開したいと望んだためです。

3，失ったもの

原発事故により、私は、小高での暮らしを失いました。現在、小高は、避難指示解除準備区域に指定されていますが、戻って生活するのはとても無理だと

思っています。

原発事故から２年半以上もまともな片付けがなされず、泥だらけのまま放置された自宅や店を以前の状態に戻すには、大変な時間と費用がかかります。費用をかけて店を再開させても、いまだに高い線量が計測されている小高に、避難した住民が戻ってくる見込みはありません。２０キロ圏内は、流通網もなく商圏自体が失われているのです。

そして、何よりも、私にとっては、この２年半というブランクが大きいです。７０歳を過ぎた今、意欲はあっても、身体がついていきません。

私は、いつでもお客様から喜んで頂ける店であり続けることを念頭において営業をしていました。ある地元のお客様は、よく、小さなお孫さんを連れて来店してくれました。そのお孫さんは、店の看板の電飾が点滅していたことから、私のラーメンを「ぴかぴかラーメン」と呼んで、喜んで食べてくれました。店を営むことができなくなった、それは、単に収入を得られなくなったということではありません。お客様が私のラーメンを食べた時のあの顔を、私は、もう二度と見ることはできません。

私は、小高で健康な限りラーメン店を営みながら、余生を過ごしたいと考えていました。終の住み処と考えていたのです。春になれば竹の子をご近所からお裾分けしてもらい、秋になれば遡上する鮭を眺めることができた、そんな小高での暮らしをもう取り戻すことができないのです。

４，被ばくによる健康影響の懸念など

私には、幼少期に原爆の被爆者と思われるケロイドの残る人を見たという体験から、放射能や放射性物質に対する恐怖があります。今の線量では、到底、小高には住めません。また、南相馬産の野菜や魚は食べられなくなりました。竹の子や山菜を近所の人からもらったり、自分でも採りに行ったりしていたのに、と思います。

子供や若い人への健康影響も心配です。孫に会いたいと思うのですが、息子

は、孫を福島に来させたがりません。息子の気持ちは、もちろん理解できます。しかし、同時に、福島が汚染されてしまったということをはっきりと認識させられ、悲しい気持ちになるのです。

5，最後に

子どものころ、私は、東京湾にほど近い所に住んでいました。幼少期、目の前に広がる海で採れたエビや穴子を食べたり、また、東京湾に流れ込む海老取川の河口で、自らあさりや牡蠣を採ったりということが日常でした。しかし、高度成長期を迎え、見る見るうちに川は真っ黒になり、少年期には、海産物を採るなどということは到底出来なくなっていました。私は、公害によって、環境が汚染されていくのを目の当たりにしたのです。私には、今の福島の姿が、子どものころ体験した故郷の姿に重なって見えます。国や大企業は、いつまでこのようなことを繰り返すのでしょうか。

今でも、小高での一日を、ふと思い出す瞬間があります。終の住み処を奪われたこと、生業を奪われたことは、痛恨の極みです。国と東電には、奪ったものの大きさを自覚し、きっちりと責任をとってもらいたいと思います。

以上